

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 16 日現在

機関番号：32636

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23330069

研究課題名(和文) 1860年代末のマルクスの信用と恐慌の研究について(抜粋ノートの編集とその活用)

研究課題名(英文) On Marx's study about credit and crises at the end of the 1860's (editing the excerpt notebooks and their utilization)

研究代表者

竹永 進 (Takenaga, Susumu)

大東文化大学・経済学部・教授

研究者番号：00119538

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 14,000,000円

研究成果の概要(和文)：4年間に亘る本科学研究費プロジェクトの中心的な課題内容は、マルクスが1866年に発生した恐慌について1868年の9月からの1年間にとった主として当時の新聞からの抜き書きと切り抜きを内容とする新メガ第19巻のためのテキスト作成作業であり、また、この作業にともなって得られるマルクスの恐慌理論についての新たな知見を研究することであった。前者については当初の見通しのように最初の3年間で完了するにはならず一部4年目の事業内容にまで食い込んだとはいえ最終的には完遂することができた。また後者については得られた知見を国内外の専門研究者たちと共有し彼らの評価にかけられるべく大規模な国際研究集会を開催できた。

研究成果の概要(英文)：The main task of this JSPS project implemented during the last 4 years was to transform into digital text the contents of the excerpt and scrap notebooks Marx made during one year from September 1868 principally from newspapers in order to trace the process of the economic crises in 1866, for the purpose of preparing the volume 19 of the part IV of new MEGA, which is to include these materials. It was equally aimed at to study these new materials for deepening our knowledge about the theory of crisis of Marx. As for the first objective, though we could not accomplish altogether the initial objective till the end of the third year, it was after all finished before the expiration of the present project. And as for the second, we could organized an international conference on MEGA and the theory of Marx on the economic crises in inviting foreign researchers from many countries of the world, to share with them our new knowledge acquired from the above work, submit it to their estimation.

研究分野：経済学説・経済思想

キーワード：新メガ マルクス 抜粋ノート 恐慌 貨幣 信用 銀行

1. 研究開始当初の背景

1990年代初頭のソ連・東欧の社会主義の崩壊にともない、70年代から開始されていた新メガ(歴史的批判的マルクス・エンゲルス全集)の刊行事業は一時危殆に瀕したが、国際的な協力体制の下で新たに再開された。1998年に大谷禎之介を代表とするメガ日本編集委員会が発足し、国際的な編集主体であるIMES(マルクス・エンゲルス財団、本部:アムステルダム)より新メガ第四部門の第17巻から19巻までの編集を正式に委託された。竹永が研究代表者となりそれまでほとんど編集作業の進んでいなかった第19巻(マルクスの1868年から69年までの恐慌をテーマとする7冊の抜粋ノートを収録する予定)の編集を加速させるために、科学研究費補助金を取得することが不可欠であると考えた。

2. 研究の目的

本プロジェクトによる研究の中心目的は、上記の新メガ第四部門第19巻の刊行に向けて、その基礎作業としてマルクスの抜粋ノートの内容を電子テキストに変換していくこと、ならびに、マルクスがこれらの抜粋ノートを作成するにいたった歴史的経緯および彼自身のそれまでの研究経過について調査し抜粋ノートの性格に対する理解を深め、これをもとに新メガの各巻に付される付属資料に収録する編集者序文の執筆のための準備作業とすることであった。

また、上述のように新メガの編集は前世紀末以来、世界のいくつかの国での編集グループ(多くはポランティア)により同時並行的に進められており、科学研究費補助金という一定のまとまった金額の公的助成を受けることのできた日本の編集委員会が中心となって、国内外の関係研究者を招聘して相互の経験・情報・意見の交換を行うべく、国際コンファレンスを最終年度末に開催することを計画した。

3. 研究の方法

新メガの第四部門は、マルクス(およびエンゲルス)が生涯にわたって作成した抜粋ノートを電子テキスト化し活字媒体によって研究者の利用に供することを趣旨としている。そのためまず必要なのは、アムステルダムの社会史国際研究所(IISG)とモスクワのロシア国立社会・政治史アルヒーフ(RGASPI)に所蔵されているマルクスの抜粋ノートのオリジナルをパソコン画面上で見ることのできるデジタル画像に変換し、これを、1920-30年代にモスクワで旧メガの準備作業の一環として作成されていた解読タイプ原稿と照合しながら、手動でデジタルテキストに変換する(パソコンに入力すること、そして、さらにこれを、マルクスが抜粋した元の文献(第19巻の場合、そのほとんどは当時イギリスで刊行されていた週刊・日刊の新聞)と照合して、抜粋箇所のオリジナルと

の異同を逐一記録していくことである。こうした地道で膨大な作業を積み重ねることが本研究の基本的な内容である。ただし研究代表者・研究分担者だけではまかない切れな部分については外部の研究者(主として日本とドイツ人ネーティブの大学院生とポストドクター生)にも頼る必要があった。また、マルクスが抜粋した元の文献(Quelle、多くは19世紀中葉のイギリスをはじめとするヨーロッパ諸国の刊行物)を収集するために、ロンドンのブリティッシュ・ライブラリーなど直接現地に赴くことも必要であった。

4. 研究成果

本科研費プロジェクトの中心目的は新メガ第四部門第19巻の編集作業とりわけその基本である当該巻のテキストの作成にある。4年間にわたるプロジェクトと交付された助成金を用いて、最初の3年間でテキストの作成作業を完了させることを当初から予定してその実現に向けて鋭意努力したが、一部を残してテキスト作成は4年度まで継続しなければならなかった。しかし2015年3月の終了時点までには本巻に収録予定の7冊の抜粋・切り抜きノートの内容をすべてデジタルテキスト化することができた。これを元にさらに新メガの各巻に付属する研究資料を整備することは今後の課題である。

このテキスト作成作業にともなってそれぞれのノートに収録されている抜粋文書につぶさに当たることが出来、1860年代末のマルクスが1866年の経済恐慌についてどのような認識を有していたのかについていくらかの手がかりが得られた。

マルクスは1868年の秋になってから、1866年5月に勃発した恐慌の展開過程とその余波について具体的な調査を開始した。この2年半の時間的なずれは、彼が恐慌勃発の当時『資本論』第一部の最終仕上げに没頭していて眼前で展開している恐慌について本格的に研究しうる余裕を持たなかったことによって説明される。彼の恐慌についての主として新聞記事からの抜粋がおよそ2年半も前に遡って始められているのはこのためである。このための情報源としてマルクスが主として依拠したのは貨幣・金融関連の専門紙 *The Money Market Review* と一般経済紙 *The Economist* であった。1866年の恐慌が「すぐれて金融的な性格」を持つことから彼は前者の専門紙を重視したが、しかし、恐慌を幅広い視点から捉えようとする彼の従来からのスタンスを保持すべく後者からの情報収集にも力を注いだ。

主としてこの二紙からの抜粋の内容を全体として見てみると、マルクスがこの時期の情報収集によって目指したのは、たしかに1860年代の恐慌の特殊な性格を把握することでもあったが、それよりもむしろ、彼が『資本論』第一部に続いて準備を急いでいた第二部・第三部の執筆に必要な材料・データの研

究であったと考えられる。68年からの1年間に作成された新聞からの抜粋には貨幣・金融業界の動きだけでなく土地所有や農業にかかわる記事も多数含まれている。このことは、この時の抜粋作業の目的がもっぱら恐慌の研究だけを中心としていたのではなかったからと解釈しなければならない。抜粋の全体はむしろ、『資本論』全体の最終的な仕上げという、マルクスが1860年代のなかば以来進めていた研究経過の中に位置づけてこそ的確に捉えられるのではない。

しかしこれらのテーマをめぐるマルクスの研究は1869年を境にしたいに対象地域をアイルランドやロシアといった、世界資本主義の中心部から周辺部に移動させてゆく。その全体像を捕らえようとすると、もはや新メガ第 部門第 19 巻に収録される抜粋ノートの範囲を超えた考察が必要となるが、これは先に言及したテキスト作成作業に続く段階と同様、今回の科研費プロジェクトによる研究の先にある課題となる。

最終第 4 年度は、重点を以上に概説したテキストの作成から新メガをめぐる最近の国内外の動向についての情報・意見の交換を趣旨とする国際コンファレンスの準備に移した。年度はじめの時期から国内外の関係研究者との連絡・協議を重ねコンファレンスの具体的な内容を少しずつ固めていくと同時に、海外研究者の招聘に必要な日程の調整や航空券・宿泊の手配に多くの時間と労力を費やした。結果的に、国内外から 20 名程度の参加を得ることができ、各人からそれぞれの研究テーマについての英文ペーパーを提出してもらった。今後これらのペーパーを編集して論文集として刊行する可能性を模索している。また、今回のコンファレンスはテーマの点からも多数の国からの参加者の人数の点からも、おそらく前例のないものと言えるであろう。これを機会に今後ともさらに研究と情報交換のネットワークが広がることが期待される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6 件)

竹永 進、マルクスの 1860 年代末の抜粋ノートと 1866 年の経済恐慌、経済論集(大東文化大学経済学会) 査読なし、第 103 号、2015、01-58

竹永 進、大戦間期の日本におけるリカード研究、経済論集(大東文化大学経済学会) 査読なし、第 102 号、2014、39-107

竹永 進、I.I.ルービンの「マルクス貨幣論概説」、経済論集(大東文化大学経済学会) 査読なし、第 100 号、2013、41-108

竹永 進、新メガ第四部門第 19 巻とその編集、マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究、査読なし、第 54/55 号、2012、127-137

竹永 進、貨幣保有のいわゆる「金融動機」についてー貨幣的循環理論とケインズー、経済論集(大東文化大学経済学会) 査読なし、第 97 号、2012、41-94

竹永 進、リカードの貨幣理論における貨幣価値論と貨幣数量説、経済論集(大東文化大学経済学会) 第 96 号、2011、107-148

[学会発表](計 11 件)

Susumu Takenaga, Marx's study on the economic crisis of 1866 in his excerpt notebooks toward the end of the 1860's, International Conference MEGA and Marxian Discourses on Economic Crises, Chuo University Surugadai Memorial Building, 2015, 2, 18

竹永 進、新メガ第 部門の完結、課題と可能性、経済理論学会第 62 回大会、第二回若手セミナーにおける講演、阪南大学あべのハルカスキャンパス、2014 年 10 月 24 日

Susumu Takenaga, Ricardo coming to Japan (from the interwar period studies), 18th Annual Conference of the European Society for the History of Economic Thought (ESHET), Walras Pareto Centre of the University of Lausanne, Switzerland, 2014, 5, 30

Susumu Takenaga, Marx's excerpt notebooks on the crisis of the mid-1860's, International Conference on Marxism and Socialism in the 21st Century, Wuhan University, China, 2013, 12, 07

Susumu Takenaga, I.I. Rubin's Essays on Marx's theory of money, Workshop on CEDEPLAR, Faculty of Economics of UFMG (Federal University of Minas Gerais), Belo Horizonte, Brazil, 2013, 11, 27

Susumu Takenaga, I.I. Rubin's Essays on Marx's theory of money, 17th ESHET Annual Conference, European Society for the History of Economic Thought, London, Kingston University, 2013, 5, 17

竹永 進、新メガ第四部門第 19 巻とその編集、経済理論学会第 60 回大会、愛媛大学、2012 年 10 月 06 日

Susumu Takenaga, Value of money in Ricardo, European Society of the History of Economic Thought, Faculty of Economics of the State University of St. Petersburg, Russia, 2012, 5, 18

Susumu Takenaga, 《Motif de financement》pour détenir la monnaie de J. M. Keynes, seminar organized by P. H. A. R. E. (Pôle d'histoire de l'analyse et des représentations économiques), 23th March 2012, Maison des Sciences Economiques (M. S. E.), Paris, 2012, 3, 28

Susumu Takenaga, Value of money: labour theory and quantity theory in

Ricardo's economic theory, 43th UK History of Economic Thought Conference, Balliol College, Oxford, 2011, 9, 08
Susumu Takenaga, The so-called 'finance motive' for holding money and the theory of monetary circuit, 15th Annual Conference of the European Society of the History of Economic Thought, Bogazici University, Istanbul, 2011, 5, 21

〔図書〕(計 2 件)

Susumu Takenaga (ed. With Y. Sato), Ricardo on Money and Finance ---A bicentenary reappraisal, Routledge, London, 2013、総ページ数 230 (担当部分 77-114)

竹永 進 (共著) マルクス抜粋ノートからマルクスを読む、桜井書店、2013、総ページ数 364 (担当部分 173-194)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

竹永 進 (TAKENAGA, Susumu)
大東文化大学・経済学部・教授
研究者番号：00119538

(2) 研究分担者

平子 友長 (TAIRAKO, Tomonaga)
一橋大学・社会学研究科・特任教授
研究者番号：50126364

窪 俊一 (KUBO, Shunichi)
東北大学・情報科学研究科・准教授
研究者番号：50161659

大谷 禎之介 (OTANI, Teinosuke)
法政大学・その他部局等・名誉教授
研究者番号：70061132

鳥居 伸好 (TORII, Nobuyoshi)
中央大学・経済学部・教授
研究者番号：70217587

高畑 明尚 (TAKAHATA, Akihisa)
琉球大学・法文学部・教授
研究者番号：70274876

出雲 雅志 (IZUMO, Masashi)
神奈川大学・経済学部・教授
研究者番号：10211731
(平成 23 年度まで研究分担者)

伊藤 武 (ITO, Takeshi)
大阪経済大学・その他部局等・名誉教授
研究者番号：40066816
(平成 24 年度まで研究分担者)

天野 光則 (AMANO, Mitsunori)
千葉商科大学・その他部局等・名誉教授
研究者番号：20049943
(平成 25 年度まで研究分担者)

赤間 道夫 (AKAMA, Michio)
愛媛大学・法文学部・教授
研究者番号：30175781
(平成 26 年 12 月 19 日まで研究分担者)

(3) 連携研究者

()

研究者番号：